

# 母の入院、連休は病院通い

## がん社会 を診る

中川 恵一

2023年の連休は毎日病院に行っていました。研修時代に戻った感じです。

母が東京大学医学部付属病院に救急搬送され、集中治療室に入院したからです。

4月29日の朝、同じマンションに住む保健師の友人から「母の様子がおかしい」と電話があり、救急車を呼んでもらいました。

88歳の母は大病などしたことがなく、東京都中央区佃の高層マンションに一人で暮らしてきました。家事はすべて

自分でこなし、食事は三食自分で作って、きちんと食べます。「昼は食べない派」の私とは大違いです。

母はもともと「心臓弁膜症」の症状がありました。22年末の区民検診で、それまでなかった「心房細動」が見つかりました。

皆さんも昔、理科で習ったと思いますが、心臓は右心房、右心室、左心房、左心室の4つの部屋に分かれています。心房は血液を受け取り、心室

は血液を送り出すポンプの役割を担います。心房と心室の間には弁膜があり、血液は一方通行で流れます。

全身から戻ってきた静脈血は大静脈から右心房に流れ込み、三尖（せん）弁を通過して右心室に入ります。

右心室の心筋の収縮によって血液は肺に送り込まれ、酸素を十分に取り込みます。この動脈血は肺静脈を経て左心房に入り、僧帽弁を通過して左心室に送られます。動脈血は左心室の強い収縮力を受けて大動脈から全身に送り出されます。

母の場合、僧帽弁と三尖弁がうまく閉じず、血液が逆流してしまふ「閉鎖不全」がありました。

さて、心臓が一定のリズムで収縮するのは、右心房にある「洞結節」から規則正しく電気信号が発信され、心臓の

筋肉が反応するからです。

母のような心房細動では、洞結節以外の場所から発生する異常な電気信号によって、心房が細かく激しく震えるように動く状態になってしまっています。

心房細動は心臓の老化の一つといえる病気ですので、がんと同様、社会の高齢化に伴い増えています。

ただ、心臓にはめったにがんはできません。心筋細胞は高度に分化していて細胞分裂がまれなため、遺伝子のコピーミスが起こりにくいことが大きな理由と思われまふ。このことは心筋梗塞が怖い理由でもあります。

ともあれ、あの朝、母が一人きりだったら、命はなかったでしょうから、ゾツとします。

その点、がんは人生の終わりを確かめ合うだけの時間を与えてくれる病気です。

何度も書きましたが、私はがんで死にたいと思います。

（東京大学特任教授）

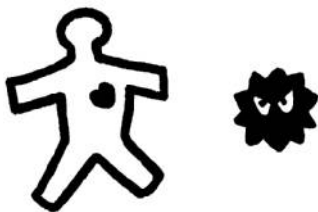


イラスト 中村 久美